

東アジアのブックロード

浙江大学 王 勇

二十年ほど前に、筆者は「シルクロード」という従来の文化交流史研究の視点に対し、新たな東アジア文化交流のモデルを構築しようとして、ブックロードの概念を提唱した。周知の通り、シルクロードは最初、プロイセンの地理学者リヒトホーフ博士によって唱えられ、中国とメソポタミア及びインドの間における漢代の貿易通路を指すものだったが、二十世紀に入ってから敷衍されつつ、文化交流の代名詞として用いられるようになった。

世界各地の文明様式が風土や歴史によってそれぞれに独自性が存在している以上、さまざまな地域間の文化交流のモデルは画一的なものではあり得ない。西洋人が興味津々と「羊毛樹」伝説を固く信じていたころ、日本列島の住民たちはすでに蚕の飼育と桑の栽培を始めて、シルクを生産していた。中日古代の歴史を振り返ってみれば、持続的にして大量なシルク交易は殆ど行われなかった。日本文化に根本的な影響を与えたのはシルクでも陶磁器でもなく、当時の西域人が目もくれなかった書籍だったと考えられる。

はじめに

西洋人が興味津々と「羊毛樹」伝説^①を語っていたころ、朝鮮半島および日本列島の住民たちはすでに蚕の飼育と桑の栽培を始めて、シルクを生産していた。中国の歴史書を紐解くと、早くも三世紀のころ、邪馬台国の女王が何度か絹や錦などを朝貢品として中国の魏王朝に輸出していたことがわかる。^②

十九世紀末、プロイセンの地理学者 Ferdinand von Richthofen によって提唱された「シルクロード」^③の概念は人々をして古代への幻想を掻き立てさせたのみならず、いまや「文化交流」の代名詞としてもてはやされている感さえある。ところで、右の言説は漢代より以来、中国と西域とを結ぶ貿易通路を活写しているのかもしれないが、これをそっくりそのまま古代東アジア地域の文化交流に当てはまるとは限らない。

世界各地の文明様式が風土や歴史によってそれぞれに独自性が存在している以上、さまざまな地域間の文化交流のモデルは画一的なものでは

^① 古代ローマ、ギリシャに流行っていた「羊毛樹」伝説について、戈岱司編、耿昇訳『希腊拉丁作家遠東古文献輯録』（中華書局、一九八七年）を参照。唐代まで、西洋人は羊毛の生えた樹木からシルクが採取されていると信じていた。

^② 『魏志倭人伝』によると、邪馬台国から魏王朝へ「倭錦」や「異文雜錦」などが貢献されていた。

^③ 原語は Seidenstrassen である。

あり得ない。ましてや、早くから養蚕技術を共有した東アジア諸国では、持続的にして大量なシルク交易は殆ど行われなかった。

一、正倉院展の啓発

二〇〇一年十月二十七日、第五十三回「正倉院展」が奈良国立博物館において開幕した。翌日、展示品の『成唯識論』巻四の巻末に「顕慶四年閏十月廿七日」という墨書が発見され、その情報がすみやかに学界に流れた。

『成唯識論』十巻は、玄奘がインド求法の成果の一つとして持ち帰った仏典であるが、顕慶四年（六五九）十月から弟子の窺基（慈恩）が筆受（口述筆記）を担当して漢訳が始まり、同年十二月に完成した。「顕慶四年閏十月廿七日」という墨書は、巻四の翻訳が完成した時点を表しており、一般的な手順から考えると、その後さらに訳語の推敲や文字の潤色を経て清書し、それから朝廷に奉ることになる。

正倉院に現存する『成唯識論』巻四は、まだ清書を経ていない窺基の手稿であった可能性が高く、仏教史上大きな意味を持っている。^①同じ時期の日本の入唐僧を調べると、道照は玄奘の門下で学んでおり、彼が帰国する時に玄奘が「舍利」と「経論」などを授けたと伝えられている。^②ここから考えると、この『成唯識論』はおそらく玄奘から贈られた「経論」の一つだったと推定される。

正倉院の宝物はさまざまな種類に及ぶ。書籍・文具・礼器・仏具・玩具・服飾品・食器具・薬物・武器などが含まれ、シルク製品が少なくなるとは言え、金銀器・ガラス製品・漆器と比べても見劣りするほどであり、至宝中の至宝としては書籍に勝るものはない。

正倉院に収蔵される書籍や古文書は何万点にもなる。例えば、主として仏教書を所蔵した「聖語蔵（しょうごぞう）」は、隋代の写経二十二巻、唐代の写経二二一巻を含め、総数では約四九六〇巻にも達している。右の『成唯識論』巻四はその中の一巻に過ぎない。

「海のシルクロードの博物館」と愛称される正倉院の宝物を目の当たりにする度に、筆者は考え込んでしまう。日本文化に大きな影響を与えたもの、日本人の精神に深く浸透したものは、色鮮やかなシルクの断片なのだろうか、それとも漢字で綴られた書籍なのだろうか。

二、八世紀のシルク流通

東西間のシルクロードは漢代に始まり、唐代に最盛期を迎えるわけだが、海によって結ばれた東アジアのシルクロードも遣唐使らによってピークに達したといわれる。八世紀において日本の政治文化の中心地だっ

^① 手稿類は、清書本が朝廷に奉る前に破棄されたらしく、殆ど残されていない。

^② 『続日本紀』巻一、道照薨伝。

た奈良は集中豪雨的に唐文化の影響を受けていたことから、今は「海のシルクロードの終着駅」とまで称されるに至ったのである。

そうならば、日本の遣唐使は西域の使節らと同じように、大量なシルクを本国に運んだと思われがちだが、事実はどうもそうではなかったらしい。まず、遣唐使は日本から何を唐へ持ち出したかを調べてみよう。

十世紀の律令の施行細則を集大成した『延喜式』（大蔵省、賜蕃客例）^①によれば、「国信物」と称される外交用のプレゼントには、殆どシルク類が充てられていた。たとえば、「大唐皇」に対して「銀大五百兩、水織絁・美濃絁各二百疋、細絁・黄絁各三百疋、黄絲五百紵、細屯綿一千屯」が用意され、遣唐使はさらに「別送」として多くの布帛類を携えていた。

奈良時代に、日本の海外交流圏の中核をなした新羅と渤海の王に贈られるプレゼントも、数の差こそあれ、種類は「大唐皇」のそれとほぼ大同小異である。『続日本紀』を調べたところ、新羅使がもたらした「調」と渤海使の携えてきた「方物」にはシルク類の記載はなく、日本側はほぼすべてシルク類を返礼している。

そこで、八世紀における日本と海外のシルク流通状況を、『続日本紀』を中心に調べてみた。そして、まったく予想外の結果に驚かされた。（下表参照）日本はシルクの輸入国どころか、もっぱら輸出国となったのである。

		唐	新羅	渤海(鉄利)	総計
日本	輸入	一			一
	輸出	四	六	十六	二十六

（参考資料：『続日本紀』、『旧唐書』、『冊府元龜』）

日本のシルク製造技術は中国六朝および百済の流れを受け継いだものであるが、奈良時代にいたっては独自の製法や文様が開発されたのみならず、律令の「調」として各地に生産を奨励し、朝廷が大量な製品を把握するようになった。高度な技術力と巨大な生産量はつまるところ、海外への流出につながったと考えられる。

三、貨幣としてのシルク

遣唐使は「四つの船」とも称されるように、約五百人が四隻の船に分乗していた。^②さまざまな役についた乗組員は唐に渡ってから生活費のほかにも買い物もするから、日本政府よりそれぞれの身分に応じて、旅費が支給されていた。この旅費リストは幸いなことに『延喜式』（大蔵省、

^① 『延喜式』五十巻は、延喜五年（九〇五）醍醐天皇の勅により、藤原時平らが編集にあたり、延長五年（九二七）に成立し、康保四年（九六七）に施行された。

^② たとえば、『扶桑略記』によれば、養老元年（七一七）の遣唐使は「五百五十七人」とある。ただし、初期の遣唐使は二隻の船に分乗していたから、三百人未満が普通だった。

諸使給法)に記録されている。その抜粋を以下に掲げよう。

大使：絁六十疋、綿一百五十疋、布一百五十端

副使：絁四十疋、綿一百疋、布一百端

判官：絁十疋、綿六十疋、布四十端

録事：絁六疋、綿四十疋、布二十端

訳語・請益生・主神：絁五疋、綿四十疋、布十六端

留学生・学問生の僦従：絁四疋、綿二十疋、布十三端

留学生・学問僧：絁四十疋、綿一百疋、布八十端

還学僧：絁二十疋、綿六十疋、布四十端

水手：各綿四屯、布二端。

右で明らかのように、全員に布帛類が旅費として支払われている。つまり、奈良時代にあつて、シルクは貨幣的価値を有しており、遣唐使の派遣によって、大量なシルク類が唐へ持ち出されることになった。

遣唐使の派遣は「朝貢」という形をとった一種の貿易活動であったと主張する研究者も少なくはない。^①もし遣唐使はシルクを携え、多大な犠牲を払って海を渡り、そして唐からシルクを購入したとすれば、それは果たして採算が取れる交易なのだろうか。はなはだ疑問に思う。

遣唐使は唐からシルク購入のために派遣されたという確かな証拠は、中国の文献にも日本の文献にも見つからない。それでは、彼らはどんな使命を背負い、万里の波濤を乗り越えて入唐したのだろうか。

四、遣唐使の使命

唐への朝貢品および貨幣としてシルク類を大量に携えて入唐した遣唐使は、いったい何を求めようとしたのか。その回答はすでに『旧唐書』(日本伝)に示されている。

開元年間の初めに、また遣唐使が来朝して儒者に経典を教えてくれるよう要請した。(中略)唐の皇帝よりもらった錫賚は全て文籍を買うのに使い、海を渡って帰った。^②

「錫賚よりも文籍」を好むという遣唐使の面目躍如たる姿がはっきり見えてくる。「文籍」というまでもなく「書籍」のことを指すけれども、「錫賚」は何を意味するものか考察してみよう。

『旧唐書』や『新唐書』における「錫賚」の用例を分析したところ、それはふつう金銭や財貨を指して用いられるが、中国の貨幣が大量に海外へ流出し、東アジア共通貨幣の機能を持つようになったのは次の五代十国を経て北宋時代になってからである。したがって、ここの「錫賚」は当時まだ貨幣機能を担っていた布帛類をさす可能性が高いと推定される。^③

① 東野治之著『遣唐使と正倉院』(岩波書店、一九九二年、三八頁)と陳炎著『海上絲綢之路與文化交流』(北京大学出版社、一九九六年三月、三十五頁)を参照。

② 「錫賚」と「文籍」は原文のままに引用した。

③ 錫賚の品目について、唐代では具体的な記録は見つからないが、一〇七三年に

西域の使節はほとんどこのような「錫賚」ばかりを目当てにしているから、シルクロードを賑わしたのだが、日本の遣唐使はそれらと違い、シルクを貨幣として書籍を買って持ち帰ったのである。もし、こうした求書活動は偶発的なケースでも個人的な嗜好でもなく、持続的な国家行為であったならば、東西間を結ぶシルクロードに対して、東アジア世界にブックロードが存在していたことになるのではないか。

遣唐使は日本の歴史において遣隋使を受けついで形で派遣され、両者は前後関係にあって連続している。^①遣隋使と遣唐使を合わせて通算約三百年の間に、日本の使節団が背負っていた具体的な使命は、まったく変わらなかったわけではないが、書籍を買い求めるのはずっと彼らの主要な任務であり、これは中国および日本の文献の中から十分な証拠を見つけることができる。例えば『善隣国宝記』(巻上)の引く『経籍後伝記』に以下のようにある。^②

推古天皇十二年正月一日、初めて暦を用いた。この時国家には書籍がまだ少ないので、小野妹子を隋に派遣して書籍を買い求めさせ、また隋の天子を訪問させた。

これは文献の記載する最初の、日本が中国に派遣した書物を求める使節団である。これ以後中日間の書籍流通のルートが開かれ、そして遣唐使の時代にはそれがさらに拡張された。

五、ブックロードの盛況

唐代の文献によれば、五十カ国以上の遣唐使が長安をめざして朝貢してきたことがわかる。そのなかで、求書活動を持続的に行なったのは、日本や新羅など東アジア諸国の使者に限られていた。

日本の場合、遣唐使らは書籍を購入する予算を国家から提供されていたらしい。^③一方、唐王朝が中華文明を積極的に受け入れようとする外国使節をとくに優遇しているから、唐での求書活動は比較的容易に達成できた。

例えば留学僧の玄昉は、一度に仏教の経論五〇〇〇巻余りを持ち帰ったが、これは開元大蔵経の総数に匹敵する。^④また留学生の吉備真備は、帰国する時に『唐礼』、『大衍曆経』、『大衍曆立成』、『楽書要略』など合わせて一五〇巻余りを持ち帰った。この他、「入唐八家」と称される最澄、

入宋した成尋が神宗皇帝から託された「日本皇帝」への贈物は「金泥法花経、錦廿疋」であり、『參天台五臺山記』に「錦廿疋」の産地・種類・模様などが詳らかに記されている。

① 帰国した遣隋使の建言によって遣唐使が派遣されたことは『日本書紀』巻二十二、推古三十一年(六二三)七月条に記録されている。

② 『経籍後伝記』は『儒伝』とも言い、平安時代末期までに成立したと推定される。原書はすでに失われ、佚文が『善隣国宝記』や『政書要略』などに散見する。

③ 前掲『延喜式』(大蔵省、諸使給法)によれば、留学生と学問僧が副使に匹敵する費用が支給されており、それに書籍購入の予算が含まれていると推定される。

④ 『続日本紀』巻十六、天平十八年(七四六)六月十八日条。唐代に編集された「開元蔵」(『開元釈教録』のこと)は全部で五〇四八巻である。

空海、常暁、円行、円仁、恵運、円珍、宗叡が唐からもたらした書籍は何千にも上り、そのリストを記録した「将来目録」は今にまで伝わっている。

ここで、鑑真和上を日本に招致したことで有名な天平勝宝六年（七五四）帰国の遣唐使の事例にふれてみたい。正倉院文書に天平宝字五年（七六一）の『奉写一切経所解』があり、それに遣唐使が持ち帰った仏教書のリストが記されている。このリストを眺めると、二十四部のうち、七部が欠巻だったことに気がつく。さらに見入ると、「欠」と明記したものは四部、残りの三部にはそのような表記はない。それはなぜであろう。

リストの最後に「これらの経論は天平勝宝六年の遣唐使が請来し、すべて日本になかったものである」とあり、つまり遣唐使らが持ち帰った書物は日本になかったものばかりである。^①

これについて、石田茂作氏は、遣唐使があらかじめ日本に欠けている書物の目録を作り、それを目当てにして求書したのではないかと推測している。たとえば、『大莊嚴法門経』二巻について、下巻はすでに日本にあるため、遣唐使はその上巻のみを持ち帰ったという。^②

ところが、欠巻だった七部のうち、四部にのみ「欠」と明記したのはなぜだろうか。それはおそらく何らかの理由でやむなく持ち帰った欠本であり、それを明記して、次の遣唐使の求書に備えたのではないかと推定される。

このように周到な計画性があり、しかも持続的な求書活動によって、どれくらいの書籍が日本に運ばれたのだろうか。この問題は容易に答えられないが、『日本国見在書目録』（八七五年）は我々に一つの手がかりを提供してくれる。この目録には一五七九部一七三四五巻が収められており、それはおおよそ『隋書』（経籍志）の半分、『旧唐書』（経籍志）の三分の一強に当たる。もしこれが皇室の図書館（冷然院）が火災に遭った後に編纂された残存書の目録であることを考えれば、それは驚くべき数字だと言わねばならない。

六、東アジア環流

上述したように、遣唐使の時代における中日間のブックロードは、大量の中国書籍の東流を担い、日本文化の発展を促した。しかしこのブックロードは決して一方通行ではなく、日本人が書いた漢文の典籍も同じ道を通して中国に逆流してきたこともある。以下にいくつかの例を挙げてみたい。

遣唐使時代にかぎって言っても、聖徳太子の『勝鬘経義疏』は七七二年に入唐僧誠明らが揚州にもたらし、そして八三八年に円載が同じ聖徳

^① 『大日本古文書』四巻、四九六頁。

^② 石田茂作著『写経より見たる奈良朝仏教の研究』、東洋文庫、一九三〇年、四十頁。

太子の『法華義疏』を天台山に寄贈した。^①また最澄や円珍などが唐へ渡るとき、日本の漢文書籍を携えて広げた。^②奈良時代に「文人の首」^③と並び称される淡海三船と石上宅嗣はみずから入唐を果たせなかったにもかかわらず、彼らの著書や漢詩文が遠く唐に流入していた。^④

上に挙げたいくつかの実例は、ブックロードが双方向に通じていたことを示している。実際、中国は安史の乱と会昌の毀仏があったことによって、書籍の散逸は深刻であった。五代十国の時代に、呉越国の天台僧義寂が宗門の復興を図ろうとしたが、経蔵に書籍がほとんどなかったことを嘆いた。ついに呉越王の銭弘俶が大金を出し、使者を海外に派遣して散逸書を求めさせたところ、高麗の諦観と日本の日延がそれに応じて大量な書籍を送ってきた。^⑤こうした散逸書の回帰は清朝の末期から民国の初期にかけて幾度も高まりを見せ、多くの書籍がそっくり戻ってきた。

このほかに、清朝では中日貿易と印刷技術が急激に発展したのに伴い、日本へ行く商船は一躍書籍を運ぶ道の主役となった。日本の公私文庫や書店はどんどん図書を注文し、清朝の商人はそれを捜し求めては積込んで運び、中国書籍は市場経済にも後押しされて、直接日本の大衆消費者と接点を持ったため、流入のスピードと数量は倍増し、ブックロードの景観は一新された。

むすびに

シルクロードとブックロードの相違は地理的な特徴に限らず、さらなる文明の内実に基づいて考察されなければならない。古代に西域へ輸送されたシルクは、現在ではたとえ深い砂漠の遺跡の中から出土しても、大抵はすでに腐ってしまっていて着用することはできない。しかし当時の遣隋使や遣唐使らが持ち帰った書籍は、今に至るまでずっと人々の知恵の源泉となっている。これらの書籍は、喩えれば文明の種子のようなものであり、長い年月をかけて根を生やし芽を出し、そして花開いて実を結び、天高くそびえる大樹へと成長した。

中国の諺に「人に魚を授けるよりは、漁を授けたほうがよい(Give a man fish, he will have a meal. teach him to fish, he will have food all his life.)」とある。^⑥もしシルクを「魚」に譬えれば、ブックはまぎれなく「漁」にあたる。生産性と持続性のある「漁」の伝授こそ東アジ

① 大庭脩・王勇共編『典籍』、「日中文化交流史叢書9」、大修館書店、一九九六年五月。

② 王勇「淡海三船をめぐる東アジアの詩文交流」、楊儒賓・張宝三共編『日本漢学研究新探』、勉誠出版、二〇〇二年十月、二七八～三〇四頁。

③ 『続日本紀』卷三十六、天応元年（七八一）六月二十四日条。

④ 王勇「淡海三船をめぐる東アジアの詩文交流」、楊儒賓・張宝三共編『日本漢学研究新探』所収、勉誠出版、二〇〇二年十月、二七八～三〇四頁。

⑤ 王勇ほか著『中日「書籍之路」研究』、北京図書館出版社、二〇〇三年十月、一四六～一七一頁。

⑥ 老子の言葉と伝えられるが、出典は不明である。

ア文化交流の特色であり、日本文化の独創性もそのなかに育まれているといえよう。